

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370410

研究課題名(和文) 言語実験の場としての六朝楽府に関する研究

研究課題名(英文) Study on Liuzhao Yuefu as the place of the linguistic experiment

研究代表者

小川 恒男(Ogawa, Tsuneo)

広島大学・文学研究科・教授

研究者番号：20185507

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は六朝楽府を主な研究対象とし、新たな言語表現が生み出されるメカニズムを明らかにすることを目的とした。研究成果の大部分は「六朝楽府訳注」「何遜詩訳注」の形で公表した。これらの「訳注」の作成にはできるだけ詳細な【語釈】を付した。実はこの【語釈】は本研究の最も重要な成果である。それぞれの語の意味だけではなく、どのような歴史的背景を持つのかを可能な限り具体的に追跡して記述した。これら語誌的な記述を収集し整理することによって六朝楽府に現れる言語表現の一覧が出来上がるはずであり、今の段階では整理がまだまだ不十分ではあるが、おおよそ700語あまりの項目を立てられるだけの資料を収集できた。

研究成果の概要(英文)：This research had for its object to make the Liuzhao Yuefu a main subject of research and make the mechanism by which new language representation is invented clear. Most of study results was published by the shape of "Translation and notes of Liuzhao Yuefu" "Translation and notes of HeXun's Poetry". [notes] as in-depth as possible was put to these making of " Translation and notes ". Well, this [notes] is the most important outcome of this research. As well as the meaning of the respective words, as far as it was possible, it was chased specifically, and it was described what kind of historical background to have. This, a list of the language representation which shows in the Liuzhao Yuefu by collecting evolution of word usage-like description and putting it in order should be finished, and arrangement was still insufficient at the stage now, but the material which can just make about approximately 700 items could be collected.

研究分野：中国文学

キーワード：六朝楽府 詩的言語 何遜 杜甫

### 1. 研究開始当初の背景

中国の「詩に用いられる言葉」はあまりにも数が多く、その言葉を用いた作品の数も多い。また、同じ言葉であっても、時代によって詩人によって少しずつ意味内容を異にすることが多い。データベースの利用によってよりスピーディーな検索が可能になったとはいえ、個々の詩人が用いた言葉の意味内容は、やはり作品そのものの「読み」から帰納されなければならないだろう。また、近年の国内外の中国古典詩研究は唐詩及び宋詩を中心としており、それらの基礎となった六朝詩に関する研究は未だ充分であるとは言えない。

本研究は六朝詩、中でも六朝樂府に着目した。文学史的に見て、六朝詩は「詩に用いられる言葉」のレベルで唐詩・宋詩を準備したばかりでなく、六朝樂府詩制作の場は詩人たちにとって言語実験の場として機能したと考えられるからである。それは、第一読者、即ち「聴き手」と場を共有するという意識、語りの姿勢をもって作られる樂府詩の場合、「なにを語るか」よりも「いかに語るか」がしばしば重要視されることになり、結果として様々な言語実験が行われることになったということである。

本研究は、六朝詩、特に六朝樂府を丹念に読み解きながら、データベースを利用するなど「詩に用いられる言葉」の分析を試み、それらが生み出されるプロセスを明らかにすることによって、近年の研究動向に対し基礎的な情報を提供できると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究は、中国古典詩研究を詩的言語というレベルから再構築するという立場から六朝詩、取り分け六朝樂府を対象とし、新たな言語表現が生み出されるメカニズムを究明することを目的とした。樂府詩制作の場は六朝詩人たちにとってしばしば言語実験の場として機能し、様々な言語表現が新たに創出された。そこで、本研究の具体的な目的を次のように設定した。

- 1) 樂府詩制作の場の形態を明らかにする。
- 2) 六朝詩に用いられた言葉に対する通時的・語誌的分析に留まるのではなく、新しい言語表現が生み出され、定着していく、或いは定着しなかった過程を明らかにする。

本研究は、六朝樂府に用いられる詩的言語の継承と発展の相を通時的、また共時的に究明することを目的の第一段階とするが、まず、北宋の郭茂倩が太古から五代までの樂府詩をほぼ網羅して編纂した『樂府詩集』をテキストに、これまでの研究実績を踏まえ、魏・晋から梁・陳に至るまでの作品を中心に分析する。特に『文選』『玉台新詠』編纂後に作られた作品群は、初唐の文学に直接の影響を与えたにも関わらず、従来あまり研究が進んでいないので、梁・陳詩の分析には力を傾注

したいと考えた。

『樂府詩集』は樂府詩を郊廟歌辭・燕射歌辭・鼓吹歌辭など12類に分け、曲調を解説し、それぞれの樂府題ごとに古辭を前に模擬作を後にほぼ年代順に配列する。このような体裁をとる『樂府詩集』を有効に利用することは、ひとつひとつの樂府題について通時的・網羅的な研究を進める上で都合がよい。個々の樂府題には多くの場合あらかじめ定められたテーマやモチーフがあり、詩人はあらかじめ定められたテーマ・モチーフがあるからこそ、思い切った言語表現を追求することができたと考えられるからである。そして、様々なデータベースを利用してそれらの詩的言語がどのように着想されたのか、唐詩・宋詩に継承されたのかどうかを明らかにする。

### 3. 研究の方法

- 1) 先行研究の収集と整理……個々の詩人を対象としてきた先学の研究成果を、樂府題別に収集整理する。この作業から異なる詩人が作った同題の樂府詩に関する先行研究を俯瞰することができるようになる。
- 2) 六朝樂府の語彙の収集と整理……「詩的言語が生み出される場」という観点から、詩人がその言葉を獲得するに至ったプロセスを明らかにしつつ、個々の語が担うイメージを、その変遷も含めて記述する。
- 3) 『樂府詩集』訳注の作成……1) 2) の作業を踏まえ、訳注を作成する。
- 4) 六朝樂府の表現面・創作面からの研究……樂府題毎の主題を明らかにし、その通時的変遷を記述する。

### 4. 研究成果

上の「3. 研究方法」に掲げた

1) については、近年日本及び中国で発表された関係論文を収集整理し、一覧を作成した。

2) 及び3) については「六朝樂府訳注」及び「何遜詩訳注」を順次作成した。この訳注の作成こそが実は本研究の基礎部分である。そもそも、漢魏六朝樂府全体に対する評価も、「遊戯性が強く、詩人の心情が吐露されることが少ない」「同じ樂府題で作られた作品は異なる詩人の手になる場合であっても、内容的に同工異曲・千篇一律の観が強い」「民間歌謡に由来する白話語彙・白話的表現や音楽に乗せて唱われる歌詞であったことに由来する樂府詩に特有の詩的言語があって、読み取りにくい場合がある」など、総じて高いものではなかった。

本来的に典型を重視するという性質を持つ中国文学の中にあっても、樂府詩は伝統の継承が自覚的に行われるのであるから、詩人は先行作品を明確に意識しつつ作品を作らなければならない。例えば、ある詩人が「有所思」という樂府題を用いて作品を作ろうとするならば、彼は同題の先行作品

に見られる語彙・モチーフ・テーマを踏襲するなり、少しく変化を加えるなり、或いはまったく新たに創作するなりといった詩作活動を自らに課さなければならなかったということである。そのような作られ方をした作品は、結果として遊戯性が強く、テーマに大きな改編を加えない限り同工異曲の観を生ずることは否めない。しかし、本研究は「千篇一律」であるからこそ「何を表現するか」よりも「いかに表現するか」を重視した、修辞主義的とも呼べる「詩的言語が生み出される場」を見出せると考える。そのような場で生み出された多様な表現こそが次の唐詩の隆盛を生んだ土壌の一つとなり得たのではないかという可能性を視野に入れつつ、本研究では「詩的言語が生み出される場」と場に参加する個々の詩人の対応をより具体的に記述することを試みた。

さらに、楽府詩がもともと音楽に乗せて唱われる歌詞であったという性質は、作り手に「聴き手」の存在を意識させたはずである。その結果、詩人は第一読者とある空間を共有しているという感覚と共に作品を生み出しただろう。このような感覚は「君不見」「欲知」など聴き手に直接訴えかける表現を生み出し、作品に臨場感を与える結果となった。今日の我々が楽府詩を読んだ時に感じるある種の分かり難さは、このような臨場感の喪失も原因の一つとなっているのではないだろうか。我々はどのような場で作品が作られ披露されたのかを想像によってしか補うことができないからである。そこで、本研究には第一読者と共有された空間を措定し、作品を読み解いたつもりである。

これらの訳注を作成する際、最も意を注いだのは【語釈】であり、本研究の根幹をなす部分である。【語釈】はそれぞれの語の通時的変遷をできる限り詳細に記述し、詩人がその語を獲得した経緯や背景を追求したものであるが、詩に用いられた語の個々について記述を進めることは、データベースによる単純な検索だけではまったく不十分である。データベースによる検索するだけでは、陶淵明が「歸去來兮辭」で用いた「孤往」という語を彼がどのように獲得したかのかを明らかにすることはできない。『淮南子』に見える「独往」の語を踏まえることを指摘する『文選』李善注のように、詩人の文学的営為を通時的に遡及できる新たなデータベースを構築する必要がある。【語釈】を収集、整理、編集することによって「六朝楽府」を読むための辞書を作ることができると思う。現在、まだ途中ではあるが800語程度の収集を終え、整理・編集に取り掛かったところである。「軽風」という語を例に挙げると、唐詩中の「軽風」という語は多くの場合「そよ風」の意で用いられる。しかし、六朝初期の用例ではむ

しろ「疾風」の意で用いられることが多い。これは「軽舟」などの語に見られるように「軽」字に「速い」という意味があるためだと思われる。それが六朝中期の「所与の詩題による詩作活動」に於いて、例えば「風軽～、露重～」のように「重」と対比され、「風軽～、雨細～」のように「細」と対比され、「日静～、風軽～」のように「静」と対比された対句が作られるようになるなど、「軽」の持つ「軽微」の意の方が「風」と結び付けられて詩中に用いられた結果、逆に「軽風」に「そよ風」の意が加えられた可能性を観察できる。このような記述を基礎に『文選』李善注のような「詩人の文学的営為を通時的に遡及できる新たなデータベース」の祖型として「六朝詩読解辞典」を準備できるところまではたどり着けたと思う。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 15 件)

- 1、小川恒男、六朝楽府訳注(二十三)「折楊柳」二首・「関山月」四首、中国中世文学研究、査読無、71号、pp78-95、2018
- 2、小川恒男、六朝楽府訳注(二十二)「折楊柳」七首、中国中世文学研究、査読無、70号、pp97-117、2017
- 3、小川恒男、何遜詩訳注(二)、中国学研究論集、査読無、35号、pp11-36、2017
- 4、小川恒男、六朝楽府訳注(二十一)「出塞」二首・「入塞」二首・「折楊柳」一首、中国中世文学研究、査読無、69号、pp94-114、2017
- 5、小川恒男、漱石「題白画(唐詩読罷倚闌干)」について、漢文教育、査読無、41号、pp37-47、2016
- 6、小川恒男、六朝楽府訳注(二十)「出塞」三首、中国中世文学研究、査読無、68号、pp42-67、2016
- 7、小川恒男、杜甫全詩訳注(三)、下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注』第三冊(講談社学術文庫)、査読無、pp471-576、2016
- 8、小川恒男、何遜詩訳注(一)、中国学研究論集、査読無、34号、pp41-54、2016
- 9、小川恒男、六朝楽府訳注(十九)「入関」一首・「出塞」四首、中国中世文学研究、査読無、67号、pp62-79、2016
- 10、小川恒男、郁曼陀「東京雜事詩」と竹枝詞、『中国古典テキストとの対話』(研文出版)、査読無、pp371-392、2015
- 11、小川恒男、六朝楽府訳注(十八)「釣竿」三首・「釣竿篇」三首・「隴頭水」五首、中国中世文学研究、査読無、66号、pp62-90、2015

- 12、小川恒男、六朝樂府詠注（十七）「隴頭水」七首、中国中世文学研究、査読無、65号、pp86-105、2015
- 13、小川恒男、六朝樂府詠注（十六）「遠期」二首・「玄雲」一首・「隴頭」一首、中国学研究論集、査読無、33号、pp48-57、2014
- 14、小川恒男、杜甫「返照開巫峽」について、中国中世文学研究、査読無、63・64合併号、pp145-156、2014
- 15、小川恒男、六朝樂府詠注（十五）「臨高台」九首、中国学研究論集、査読無、32号、pp62-82、2014

(4)研究協力者 ( )

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

小川 恒男 (OGAWA, Tsuneo)  
広島大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：20185507

##### (2)研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3)連携研究者

( )

研究者番号：